

第25回 “「障害」のある子どもの高校進学を考える学習会” 「学校の選択肢」

2022年3月27日

樋口 由果

令和4年4月に高校3年生になる、暁に立と書いて「ありゅう」と名付けた私の息子。暁は太陽が高く上るという意味があり、立は地に足をつけてしっかり歩むという意味があります。周りを明るくさせて自立した人生が送れるようにと願いつけた名前です。

そんな暁立は、子宮筋腫の合併妊娠で、平成16年6月9日、緊急手術で1656gの低体重児として生まれました。

お腹の中で筋腫に圧迫されていたので、今でも足が真っすぐに伸ばせませんが、毎日活発に走り回って過ごしています。

そんな暁立の生い立ちと共に、今までの学校生活についてお話をさせていただきます。

暁立が発達について指摘を受けたのは1歳半の時、保育園の担任から「こんなに成長が遅れている子は見たことがない」と言われたことでした。正確にはもっと前に市の検診で指摘をされていたのかもしれませんが、初めての子で、我が子の発達について、あまりよく理解をしていませんでした。心の片隅で不安もありましたが、目を背けていたのかもしれません。

そんな私でしたが、ある日、保育園に迎えに行くと、教室で走り回っている同じクラスのお友達を、ずり這いで必死に追いかけている暁立の姿を見たことで、やっと現実に向き合うようになりました。

病院に行き、発達検査を受けたりしました。もうすぐ3歳でもぎりぎり1歳の知的能力。ワンワン、パパ、ママがやっと聞き取れる範囲で言えるくらいでした。自分の名前はもちろん言えませんでした。

その時に通っていたのは私立保育園で、加配というものはありませんでしたが、暁立に対してどう対応すればよいのかを一緒に考えてくださいました。同じクラスの保護者に向けて、暁立の障がいについてカミングアウトをする時間も作っていただきました。けれど、運動会や生活発表会に出ると、殆ど何も出来ない暁立の姿を見ることが、他の子と比べても仕方がないと分かっているにもかかわらず、だんだん辛く感じる私がありました。そこで、市の保健師さんの勧めもあり、障がいのある子供の受け入れに慣れていて、加配の対応もできるということで、公立の保育園に転園することを決めました。

公立保育園には暁立と同じように発達の遅れているお子さんがおり、そこで

色々情報を得ることが出来ました。何より同じ気持ちを持つお母さんが近くにいてということで、私自身が「障がい」を素直に受け入れられるようになりました。年長の1年間は、母子通所の療育を受けたりもして、同じように障がいと向き合っているお母さんたちと交流することができ、心に余裕が出来ました。

そしていよいよ小学生。地域の小学校か、支援学校なのか、初めて学校を選択することになりました。とは言え有り難いことに、私たちが住んでいる交野市は、障がいのある子の地域小学校への受け入れがとても柔軟であるため、悩むことなく地域の小学校に入学を決めることができました。一番のきっかけは、当時の小学校の校長先生がとても親身な方で、保育園にも暁立の様子を見に何度か会いに来て下さったり、入学式ではどこへ座れば落ち着いていられるのかを、直々に打ち合わせしてくださったりしたことでした。今でも「ありゆうちゃん、小学校で待ってるで！」と笑顔で声を掛けて下さったことを鮮明に覚えています。更には肢体不自由児にしかつかないとされていたスクールヘルパーもつけていただくことになり、安心して通学が出来ることになりました。

暁立の通った小学校は、一学年一クラスというような、交野市で一番児童数が少ない学校であったため、6年間環境が大きく変わることなく同じ友達が側にいました。入学した時には保育園でも行ったカミングアウトをまずは保護者に行い、次に友達に向けても行いました。「みんなは学校から帰ったら、お家の人にその日に起こった出来事を話せるよね？でも、暁立はできません。」こう話した時、驚いた表情を見せた友達がいたことを今でも覚えています。

一人での登校は難しかったため、毎朝一緒に登校し、学校に着くと支援担やスクールヘルパーさんに学校での様子を教えてもらったりしながら楽しく通う毎日でした。

とは言うものの、放課後児童会では裏門から一人で出て行く事件を起こし、急遽カギが取り付けられるようになったり、ふざけて学校中庭の池にはまったり、言葉で返せないからか友達を引っ掻いてしまい保護者に謝りに行ったり、距離が理解できず必要以上につきまとい、好きな女の子に拒絶されたりなど、小学校生活では色々なことがありました。

けれど、友達が大好き、先生が大好きな暁立は、一度たりとも学校に行きたくないということはありませんでした。

いよいよ中学校を意識し始めた6年生。健常の友達と過ごせる環境はここままで、暁立は支援学校に進むものだと考えていました。けれど、地域の中学校ってどんな様子なのだろう？地域の中学校の支援クラスってどんなものなんだろう？と、興味があったので、見学に行ってみることにしました。

見学で迎えてくれたのは、定年間近の男性教師でした。いわゆる養護学級と呼ばれる頃から支援に携わってきたそうで、熱心に学校の取り組みについてお話を聞かせて下さいました。けれどそこで聞いたのは「重度の障がいを持つ子

が来るところじゃない」と言う言葉でした。やっぱり支援学校に行くしかない、支援学校にしか行けない、そう思いました。

でも、何か納得できませんでした。中学校って義務教育のはずなのに、どうして行けないんだろう…そう思うようになりました。

同じ頃、もう一つ考えていることがありました。暁立は時々家から一人で出て行くことがありました。ある時は、早朝にパジャマ姿で外へ行き、隣の家のインターフォンを鳴らしたり、また別の時には公園でトラブルを起こしたこともありました。一人でウロウロしているのを見た近所の方が、家に知らせに来てくれたこともありました。もちろんこれは近所の方が暁立を知ってくれているから出来たこと。それなら暁立を知ってくれる人が一人でも多くいて欲しい。親がいなくなっても、ここに住み、生活をしていくのであれば、一人でも多くの人に“樋口暁立”を知っていてもらいたい。

それなら地域の学校に行かせよう！支援学校ではなく、地域の中学校に通わせる選択をしました。

家族とも話し合い、決心した私は、早速小学校の先生に伝えました。支援学校に進むものと思っていた小学校の先生方は大騒ぎでした。足し算も出来ない、言葉も書けない、しっかり話すことも出来ない、そんな子を地域の中学校に行かせる？！

「それは暁立さんが可哀想です」「いじめられますよ」

「何のために行かせるんですか？」「お母さん、やめといた方がいいです」

校長先生、教頭先生、担任、支援担の4人に囲まれ、そう言われました。

中学生になったら受験やクラブ活動で忙しくなり、みんなが自分の事で精一杯で、小学生の時のようには上手くいかないと言われました。そして、目も行き届かなくなり、陰でいじめられるかもしれないとも言われました。

「お母さん、さすがに酷いんじゃないかな。これは暁立さんの為を思って言っているんだよ。」

“私は酷い親”かもしれない。これは親のエゴかもしれない。そんな風に考えたりしてめちゃくちゃ悩みました。でも、絶対に言えるのは、暁立は人が大好きということでした。暁立なら大丈夫という自信がありました。

何度も止められ、何度も確認されました。けれど私は暁立と前に進むと決めたので、動じることはありませんでした。

地域の中学校に進学を決めたことは、中学校側も驚いていました。けれど、決まったからには受け入れ準備を整えようということで、入学前に打ち合わせで暁立と一緒に中学校へと足を運びました。小学校で取り組んでいた学習の事、排泄の事、授業中にすぐ眠たくなってしまう事、人との距離感の事などを色々伝えました。帰る前に「重度の障がいを持つ子が来るところじゃない」と言っ

ていた定年間近の男性教師が「待ってるで」と暁立に声を掛けてくれました。ホッとしたのを覚えています。

入学すると、他のお子さんの担当ではありましたが、小学校でお世話になったスクールヘルパーさん、そして暁立専属のヘルパーさん、更にヘルパーさんが休みだった場合でも対応が出来るようにと3人のヘルパーさんが出迎えてくれました。学校生活がスタートしてからも、ひとつひとつが確認することばかりでしたが、思っていた通り、暁立は学校が楽しくて仕方が無い様子でした。土曜日になると「げつようび、がっこ！」と早く行きたくて怒るほどでした。

体育と音楽が大好きで、その授業がある日はうきうきして登校していました。中学校までの道のりは、交通量は少ないけれど、信号を見て、横断歩道を渡らなくてはいけない場所がありました。入学前から練習していましたが、やはり不安で毎朝一緒に登校していました。ところが中学2年生にもなると、暁立も思春期になり、母と一緒に歩くことを嫌がるようになりました。最初は気付かれないように距離をとってついて行きましたが、歩くペースも早くなり、ついて行くのが難しくなってきたので、思い切って一人で通学させるようにしてみました。

と言いつつ時々様子を見るためにこっそりついて行くこともありました。久しぶりに行ってみると、色々な人と挨拶をしている暁立に驚かされました。「おはよう！」「いってらっしゃい！」「気を付けて行きや！」と声を掛けてもらったり、中学校の門の前に立つ地域の見守りシルバーさん達とは「おはよう！」と力強くハイタッチをしてご機嫌で登校している姿を見ることが出来ました。シルバーさんに話を聞くと、毎朝元気に挨拶をしてくれるので、暁立から元気をもらっているということでした。

勉強は出来ないけれど、こうして地域の人々の温かみを感じながら、毎日元気に登校している暁立の姿を見て、本当に地域の中学校に行かせて良かったなと感じました。

地域の中学校に通い、出来るようになったことは沢山ありました。支援級の先生やスクールヘルパーさんが毎日出してくれた課題のお陰で字がきれいになったこと、平仮名しか書けないけれど、自分の名前を枠内にきれいに書けるようになったこと。50分の授業時間、ウロウロせずに静かに座っていられるようになったこと。ふざけて良い時、悪い時のメリハリがわかるようになったこと。言葉が増えて会話が出来るようになったこと。そして、運動会では友達と肩を抱き合っただけで応援している姿を見ることが出来ました。いじめなんてなく、誰かがいつも暁立に手を差し伸べてくれていました。

そんな暁立の高校進学については、正直全く考えていませんでした。支援学校の選択しかないだろうと当然のように考えていました。けれど中学1年生の時、こちらの学習会に興味本位で参加させていただいたことから、暁立でも高校へ行く選択肢があるのだと、初めて知りました。ここで情報を得ていなかっ

たら、高校を選択出来るなんて、全く知らないままでした。何故なら、中学校・小学校の先生はもちろん、教育委員会の方でさえ、暁立が公立高校へ行く資格があるなんてご存じではなかったのですから。

中学校の支援担へ早速この話を伝えましたが、いまいち信憑性に欠けるような感じで受け止めておられた様子でした。入学時、中間テストや期末テストなんて必要ないだろう、評価点なんて暁立には必要ないだろうと言われていましたが、高校進学の可能性が1%でもあるのなら、点数は0点でも良いからテストへの参加と、提出物にも取り組み、評価点をつけてもらえるようお願いしました。

そのことで、提出物については、国語、英語、数学は暁立が出来る内容のもの、社会、理科については、親が赤字で答えを書き、それをなぞり書きしたものを提出し、評価点をつけてもらいました。

中間・期末テストでは、名前だけはしっかりと書けるように練習をしました。そんな中、支援担もこちらの学習会に参加をしてくださり、やっとなり理解を示してくれたので、暁立の受験についても前向きに考えて下さいました。

こうして地域の中学校を卒業した暁立も、4月から寝屋川高校定時制の3年生になります。高校ではひらがな、お金の計算、時計の勉強をしています。変わらず学校が大好き、体育が大好き、友達が大好きで、休みの日はとても残念そうにしています。定時制は4年生までであるのですが、こんなに大好きな学校も、残り2年なので、寂しいだろうなと思っています。もちろん一度たりとも学校に行きたくないと言ったことはありません。

小学校、中学校、高校と進学のたびに学校の選択をしてきました。勉強も出来ないのに何のために行かせるの？と言われてたこともありました。確かに勉強は出来ないかもしれませんが、地域の小学校・中学校、公立高校に通うことで、生きていくために必要な、人とのコミュニケーションの力は確実に成長したと思っています。もちろん誰かの手を借りなければ出来ないことばかりですが、守られてばかりではなく、健常の子供たちと同じ時間を過ごしてきたことは、これからの暁立の生活に大きく役立っていくと確信しています。

障がいがある暁立でも、大きな声で元気一杯挨拶することが出来ます。そして、その挨拶で、人を笑顔にしたことがあります。きっとこれからもあると思います。障がいがあっても、健常の友達と一緒に学び、一緒に過ごす時間があることは、健常のお子さんにとっても人を敬う気持ちを育てることに繋がると思います。

障がいがあるお子さんが、義務教育である小学校・中学校に、悩むことなく進学が出来ること、受験はありますが、それは高校だって同じであって欲しいと心から思います。そして、これから学校を選択する障がいを持つ子供たちが、一人でも多く、自分の選択したい進路に進む方法があること、その正しい情報を、沢山の方に知ってもらいたいと思っています。